

刘琛琛
著

日本語・中国語普通話・粵語におけるアスペクトの対照研究

日语・中文普通话・粤语中



的比较研究



浙江工商大学出版社
ZHEJIANG GONGSHANG UNIVERSITY PRESS

刘琛琛
著

日本語・中国語普通話・粵語におけるアスペクトの対照研究

日语・中文普通话・粤语中



体的比较研究



浙江工商大学出版社
ZHEJIANG GONGSHANG UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

日语·中文普通话·粤语中“体”的比较研究/刘琛琛著.
—杭州:浙江工商大学出版社,2013.7

ISBN 978-7-81140-863-8

I. ①日… II. ①刘… III. ①句法—比较语法学—日
语、普通话、粤语 IV. ①H364.3②H146.3③H178

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 127834 号

日语·中文普通话·粤语中“体”的比较研究

刘琛琛 著

责任编辑 罗丁瑞

封面设计 王好驰

责任印制 汪俊

出版发行 浙江工商大学出版社

(杭州市教工路 198 号 邮政编码 310012)

(E-mail:zjgsupress@163.com)

(网址: <http://www.zjgsupress.com>)

电话:0571-88904980,88831806(传真)

排 版 杭州朝曦图文设计有限公司

印 刷 杭州杭新印务有限公司

开 本 880mm×1230mm 1/32

印 张 8.625

字 数 230 千

版 印 次 2013 年 7 月第 1 版 2013 年 7 月第 1 次印刷

书 号 ISBN 978-7-81140-863-8

定 价 32.00 元

版权所有 翻印必究 印装差错 负责调换

浙江工商大学出版社营销部邮购电话 0571-88804227

序

刘琛琛对日语「アスペクト」(“体”)的研究已经历时数年,其间不断充实纳新,逐渐整理成形,汇集成书。本书付梓,是刘琛琛在学术上多年耕耘的一个成果、一分收获,为她欣喜之余,以序为贺。

2007年的日本中国语学会第57届大会,博士在读的刘琛琛在论文发表之余,与我长时间交流了关于日汉语学研究中的一些内容和观点,其中亦涉及“体”的问题并不乏新的见解。当时的探讨给我留下很深的印象,刘琛琛对「アスペクト」(“体”)的研究已经有相当的深度。时隔数年,当时的研究片段进一步理论化系统化,令人对本书更加期待。

本书整合了刘琛琛的博士论文以及之后发表的数篇论文的内容,可谓集作者本人近年来学术研究工作之大成。关于「アスペクト」(“体”),各国学者进行了大量的研究,推陈出新显得尤为难得。本书利用 Comrie Bernard 的理论,从语法、语义和语用的角度深入探讨中日语言“体”这一语法问题,主要围绕中文普通话助词“了”和“着”所表示的体意义与中文方言粤语助词“咗”“住”“紧”、以及日语动词のシタ形和シテイル形の异同展开。将中文的方言加入对比的范围可以说是本书的亮点之一;书中提出将位于句末的“了”统一划分为具有体意义的“了₂”这一观点也与前人有所不同;在中文里提出「アスペクチュアリティ」这个概念,并将其与「アスペクト」分开来讨论,是本书的创新之处。

当然，关于中日文「アスペクチュアリティ」和「アスペクト」的研究仍然深远，希望本书的出版成为一个新的起点，以此为基石，将该课题的研究继续推进，更深入、更全面。

最后，再次祝贺本书的出版，也祝愿刘琛琛的工作、研究更上一层楼。

朱继征

2013年7月于日本新潟大学

目 录

第一章 序論.....	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 テンス、アスペクト、モダリティの定義.....	4
1.2.1 本稿のテンスの定義.....	4
1.2.2 本稿のアスペクトの定義.....	5
1.2.3 本稿のモダリティの定義.....	9
1.3 普通話のテンス表現とアスペクト表現.....	10
1.4 粵語のテンス表現とアスペクト表現.....	15
1.5 日本語のテンス表現とアスペクト表現.....	17
1.6 論文の構成と概要.....	19
第二章 普通話の“了”.....	22
2.1 先行研究.....	22
2.1.1 呂叔湘.....	22
2.1.2 劉勳寧.....	27
2.1.3 木村英樹.....	27
2.1.4 楊永龍.....	29
2.1.5 金立鑫.....	31
2.1.6 石毓智、大河内康憲.....	32

2.2 “了”の分類と動詞の分類	33
2.2.1 “了”の分類	33
2.2.2 動詞の分類	34
2.3 “了 ₁ ”の意味分析	37
2.3.1 完成相アスペクトマーカである“了 ₁ ”	37
2.3.2 限界性と“了 ₁ ”	42
2.4 “了 ₂ ”の意味分析	47
2.4.1 動詞につく“了 ₂ ”	47
2.4.2 名詞につく“了 ₂ ”	62
2.4.3 モダリティ的意味を表す“了 ₂ ”	65
2.5 本章のまとめ	66
第三章 普通話の“着”	69
3.1 先行研究	70
3.2 動作継続を表す“着”	72
3.2.1 進行相と継続相の意味的相違	72
3.2.2 動作進行を表す“在”と動作継続を表す“着”における相違	75
3.3 状態継続を表す“着”	78
3.3.1 動作動詞の場合	79
3.3.2 変化動詞の場合	80
3.3.3 状態動詞の場合	80
3.4 存在文の“着”と連動文の“着”	82
3.4.1 存在文	84
3.4.2 存在文に用いられる“着”と“了 ₁ ”に関する先行研究と問題点	87
3.4.3 存在文の動詞	88
3.4.4 存在文における“着”と“了 ₁ ”との使い分けと意味的相違	90

3.4.5 連動文の“着”	100
第四章 中国語方言である粵語との対照分析.....	103
4.1 粵語のアスペクトと動詞分類.....	103
4.1.1 粵語のアスペクト	103
4.1.2 粵語の動詞分類	107
4.2 普通話の“了”と粵語の“咗”	111
4.2.1 “咗”の先行研究と問題点	112
4.2.2 文中の“咗”	116
4.2.3 文末の“咗”	120
4.2.4 否定文に用いられる“咗”	125
4.3 普通話の“了 ₂ ”と粵語の“la3”	130
4.3.1 粵語の“la3”	131
4.3.2 “咗”と共に起する場合	134
4.3.3 単独で用いられる場合	140
4.4 普通話の“着”と粵語の“紧”“住”	146
4.4.1 進行相の“在”と“紧”	147
4.4.2 “着”と“住”	152
第五章 中日対照分析.....	166
5.1 日本語のシタとシテイル	168
5.1.1 日本語動詞の分類	168
5.1.2 シタシテイルに関する工藤(2002)の説	170
5.2 シタと“了”	176
5.2.1 完成相過去のシタ	178
5.2.2 パーフェクトのシタ	183
5.2.3 “了”とシナカッタ	200
5.3 シテイルと“了 ₂ ”	205
5.3.1 テンス的側面	206
5.3.2 アスペクト的側面	211

5.3.3 シテイナイと“了 ₂ ”	218
5.4 モウと“了 ₂ ”	219
5.4.1 モウについて	219
5.4.2 アスペクト的意味のモウと“了 ₂ ”	222
5.4.3 禁止命令の“了 ₂ ”とモウ	226
5.5 シテイルと“着”	227
5.5.1 動作継続の場合	228
5.5.2 結果継続の場合	232
5.5.3 単なる状態継続の場合	236
第六章 結論	242
6.1 本稿の研究結果	242
6.1.1 普通話動詞と粵語動詞の分類	242
6.1.2 “了”の分類と文法的意味	245
6.1.3 “着”の文法的意味	247
6.1.4 粵語との対応	248
6.1.5 日本語との対応	251
6.2 今後の展望	257
参考文献及び例文出典一覧	260
＜例文出典＞	265
后 記	266

第一章 序 論

1.1 はじめに

中国は面積が広く歴史も古い。そこに住んでいる人も様々で、56の民族がある。その内、人口の94%も占めている民族は漢民族である。漢民族が使用している言語は「漢語」です。同じ漢語の中でも場所によって全く通じないほど方言間の差がある。そこで標準語が制定され、漢民族の共通語ということから「普通話」と名づけられた。それは現代の北京語の発音を標準音として北方の言葉を基礎とし、現代口語文の文法によったものである。日本で言われている「中国語」とは、この「普通話」を指していること。本稿では中国語の方言との比較研究もするので、誤解を避けるために、考察対象であるこの意味での「中国語」を「普通話」と称すことにする。

中国語の文法研究においては、よく注目されているのがアスペクトマーカに対する研究であり、その中でも、完成相を表すアスペクトマーカの“了 le”、継続相を表すアスペクトマーカの“着 zhe”、及び経験相を表すアスペクトマーカの“过 guo”に関する研究が最も盛んであると言える。多くの研究が行われ、十分な成果が得られていったが、従来の研究では、普通話の面だけでの研究が多く、中国語の方言との対照研究は未だ少ないと考えられる。また、従来のアスペクト・テンス研究は、各言語の特定の

（主として）動詞變化形の用法の分析から出発したが、近年の一般言語学研究では、特定の言語形式から離れ、意味論的な観点から論理的に可能なアスペクト・テンスを分類し、各言語がそれらをどのように（文法化して、或いは、副詞など語彙的手段で）表しているかを記述する、という手法が用いられている。このようなアスペクト・テンス分類としては、Comrie・Bernard のものが標準的である。工藤真由美の日本語アスペクト研究も、同じ形式が複数のアスペクトに用いられることを詳述している。このような方法は、形式一対一には対応しない対照言語学的な研究では不可欠であると言える。

現代日本語のアスペクトに関する研究から見ると、金田一(1950)を代表とする動詞の四分類に基づくアスペクトの形と意味に関する研究から始まり、奥田(1977)を代表とするスルとシテイルの形態論的な対立をアスペクト的な形式と意味の統一として捉える研究へ発展し、更に近年最も注目される須田(2003)の文における意味的なカテゴリーとしてのアスペクチュアリティの体系の面からの研究にまで視野が広げられている。金田一の段階と奥田の段階は動詞の形態的な面、又は意味的な面からの語彙レベルのアスペクト的な研究であれば、須田の段階は動詞の形態的な面、意味的な面、更に時間の状況語、動詞の補語、副詞など外部的なものなどを合わせた文レベルのアスペクト的な研究であると言える。但し、アスペクチュアリティの体系の面においても、中心的なものと周辺的なものがあり、スルとシテイルの対立という動詞の形態的なものは中心的なものであり、それ以外は周辺的なものであると考えられる（須田 2010、工藤 2002）。こうした日本語のアスペクトに関する研究の発展と方法から見ると、須田(2003)はより全面的な結果が得られるため、最も具体的であり、包括的であると思う。

それに対し、現代中国語普通話のアスペクトに関する研究では、王力(1943)の研究から今まで発展してきても、主に動詞につく“了”、

“着”、“过”を巡って行われ、基本的にこの三つの助詞の面から展開されている。戴耀晶(1997)は中国語ではアスペクトが文レベルのものであることを主張し、中国語における最初のアスペクチュアリティーの体系の面からの研究であると言える。しかし、文のアスペクト的意味を決定する中心的なものと外部的なものが存在するかどうか、存在するのであればその分類と働きは何であるかなど問題については言及されていない。日本語では動詞のスルとシテイルの形式という形態論的なアスペクトの表すアスペクトの意味はアスペクチュアリティーの中心となっていると同様に、中国語でも形態論的なアスペクトの表すアスペクトの意味はアスペクチュアリティーの中心となるはずであり、それは動詞につく“了”、“着”、“过”という三つの助詞であると考えられる。日本語ではスルとシテイルの対立という二項対立と異なり、中国語では“了”、“着”、“过”の対立という三項鼎立のようであるため、中国語のアスペクトの体系は日本語より複雑のようである。それは、日本語のアスペクトは「完成相」と「継続相」の対立に対し、中国語のアスペクトは「完成相」、「継続相」、「経験相」の対立であるから。

本稿では日本語、又は中国語に対する専門的な言語学考察ではなく、対照言語学的の面から両言語における対照考察であるため、共通点のある部分だけを考察対象とする。そこで本稿では、このような意味論的枠組み(＝アスペクチュアリティー)を用い、両言語のアスペクトが共に扱う「完成相」と「継続相」の形態論的マーカーを対象にして考察を行うことにするが、紙幅の関係で、アスペクチュアリティーの中心である形態論的な形を対象に比較対照を行う。主として普通話の“了”、“着”と中国語方言である粵語(ここでは粵語広州方言を指す)、また、日本語との対照研究を行うことにより、普通話の“了”、“着”の文法的意味、“了”と粵語の“咗”、“la3”、日本語のシタ、シテイル、モウとの意味的相

違と使い方の相違、及び、“着”と粵語の“紧”、“住”、日本語のシテイルとの意味的相違、使い方の相違など問題を解明することを目指す。また、普通话の“了”が動詞に後続し、文末に生じる時にはアクセントによって意味が変わることも観察される。例えば、“坏了”のような文のどこにストレスを入れるかということによって、意味的に「壊れた」、又は「壊れている」に変わると考えられるが、これはむしろ音韻論的な問題であり、本稿の考察内容と異なっているので、本稿では扱わないことにする。それから、普通话のテンス・アスペクト形式が他の副詞とどのように共起してどんな意味を表すかを含めて分析する。更に、示すことにより、この分析が一般言語学的な妥当性を持つかどうかを検証する。

1.2 テンス、アスペクト、モダリティの定義

1.2.1 本稿のテンスの定義

テンス(tense)について Comrie(1988)では「テンスは、差し出された場面(situation)の時間を別の時間に、普通は発話の瞬間(moment)に関係づける」(p10)と述べられている。中国語の用語では“时／時”“时制／時制”などと呼ばれている。更に、「諸言語に見られる一番普通のテンスは現在・過去・未来であるが、勿論全ての言語にこの三つのテンスの区別があるわけではないし、テンスの区別を全く持たない言語もある」(p.10)と Comrie(1988)で指摘されている。例えば、中国語は一般にテンスの区別を持たない言語であると言われている。現在テンスで述べられる場面は、時間的に発話の瞬間と同じ時点に位置づけられる。例えば、「ご飯を食べている」は“正在吃饭”のようである。過去テンスで述べられる場面は、発話の瞬間よりも前に位置づけられる。例えば、「ご飯を食べ

た」は“吃了飯了”のようである。未来テンスで述べられている場面は、発話の瞬間よりも後に位置づけられる。例えば、「ご飯を食べる」は“吃饭”のようである。

これまで述べてきたテンスは全て記述される場面の時間を発話の瞬間に関係づけるものであり、このようなテンスは絶対的なテンスと呼ばれている。時間の関係づけの、もう一つの可能な形式は、時間の相対的な関係づけである。そこでは、場面の時間は発話の瞬間との関係において位置づけられるのではなくて、ある別の場面の時間に関係づけられるのである。例えば、「明日、僕がここに来ていたこと先生に言わないでね」(工藤 2002,p178)の「来ていた」は絶対的なテンスというよりも、むしろ相対的なテンス(=主文の出来事時以前)を表している。つまり、テンスは簡単に過去・現在・未来という時間的な前後関係を表す文法的カテゴリーであるが、更に「絶対的テンス」と「相対的テンス」に下位分類することができる。

Comrie(1988)と工藤(2002)ではテンスの定義について明白に、それに分かりやすく述べているから、本稿では Comrie(1988)と工藤(2002)を参考にし、次のように定義することとしたい。テンスは、差し出された場面の時間を別の時間に、特に指定されていなければ(デフォルトでは)発話の瞬間に関係づける。前者を相対的テンス、後者を絶対的テンスと呼ぶ。

1.2.2 本稿のアスペクトの定義

Comrie(1988)では一般言語学の面からアスペクトを「場面の内的な時間構成をとらえる、さまざまなし方である」(p.12)と定義し、その対立を次のように図式化している。



(Comrie Bernard, 山田小枝訳. 『アスペクト』 むぎ書房より)

完結相は不完結相の反対物であって、「内的時間構成とは無関係に、ひとまとまりのものとして捉えられる場面を指し示す」(p.25)と定義され、不完結相は「ある場面を内部から眺めて、その内的な時間構造をはっきりと述べることである」(p.43)と定義されている。また、継続相は「場面が一定期間つづく、或いは少なくともその場面が一定期間つづくものと見なされている事実を示す」(p.68)とされ、習慣相は「反復的であろうとなかろうと、長い期間にわたって性格的なものとして現れてくる場面」(p.47)を描き出すとされている。非進行相と進行相については、「非進行相は多かれ少なかれ永続的な有様を差し出していて、進行相は一時的な状態を差し出している」(p.61)と述べられている。

また、Comrie(1988)では完結相とは異なる、「パーフェクト(perfect)」という特別なアスペクトが存在されており、「パーフェクトは二つの時点の間の関係を表現している。つまり、一方には先行する場面から結果として生じてくる状態の時間があり、他方には先行する場面そのものの時間があって、パーフェクトはこれらの二つの時点の間の関係を表現している」(pp.83-84.)と指摘されている。より一般的に言えば、パーフェクトは、ある過去の場面が引き続き現在にまで関わってくることを示しているのである。更に、パーフェクトをほかのアスペクトとはかなり異なった意味でのアスペクトであるとした上で、「結果のパーフェクト(perfect of

result)」「経験のパーフェクト(experiential perfect)」「存続する場面のパーフェクト(perfect of persistent situation)」「近接過去のパーフェクト(perfect of recent past)」に下位分類している。しかし、すべての言語にこれらの意味を備えているわけではなく、言語によってこれらの意味のうちのいくつかが備えられ、独自の形式で表現していることも指摘されている。

工藤(2002)では日本語の面からアスペクトを「基本的に、完成相と継続相の対立によって示される、＜出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違＞を表す文法的カテゴリーである」(p.8)と規定し、「パーフェクト」をアスペクトから除外している。それは、パーフェクトは「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていることを表している」(p.99)ため、「設定時点」の有無においてアスペクトと異なっているからである。しかし、工藤はパーフェクトをアスペクトと区別していながら、シテイルというアスペクト形式の派生的な意味の一つと見ているので、パーフェクトが一体アスペクトであるか度か判断しにくくなる。それに対し、須田(2010)では、アスペクトを「動詞のさししめす動作が、話し手によって設定された基準時点に関係付けられることによって顕在化する、その動作の内的な時間構造の、二つ以上の対立的な部分(要素)をとりたてて、それらを動詞の形態論的な手段(規則的な形)によって表すもの」と規定しており、「基準時点」の有無という点において Comrie、工藤の定義と異なっている。パーフェクトについて、須田(2010)は「パーフェクトでは、動作の内的な時間構造に対して外的に、つまり、内的な時間構造をさらけ出すことなく、動作が、間接的な効力など、何らかの、別のし方で、基準時点に関係付けられている」(p.67)から、アスペクトとはっきりと区別している。工藤(2002)ではパーフェクトを＜状態パーフェクト＞と＜動作パーフェクト＞に分け、それをあらわすものとしてシテイルの形

とシタの形があるとしているが、須田(2010)ではパーフェクトを明示的なパーフェクトと非明示的なパーフェクトに分けた上で、明示的なパーフェクトを表すものとして、「ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた」という＜先行的な意味＞を表すシテイルの形とシテアルの形、「以前の動作やできごとを経歴、記録としてあらわすすがた」という＜事実的な意味＞を表すシテイルの形とシタコトガアルという形があり、非明示的なパーフェクトを表すものとしては、シテオクの形や完成相・過去形があるとしている。

アスペクトは中国語の用語で“动相／動相”“情貌／情貌”“动态／動態”“时态／時態”“态／態”“体／體”“体貌／體貌”などと呼ばれている(楊永龍 2001)。呂淑湘(1942)では“动相”と呼び、“动相指的是一个动作的过程中的各种阶段／アスペクトはある動作の過程における各段階のことを指し示す”(p.228)と規定しているのに対し、戴耀晶(1997)ではアスペクトを“体”と呼び、“体是观察时间进程中的事件构成的方式／アスペクトは時間の流れにおける事件の構成を捉える仕方である”(p.5)と規定し、異なる形式によって“完整体／完整相”と“非完整体／非完整相”の対立を表すとしている。呂は語彙レベルでアスペクトを定義しているのとは違い、戴は文レベルでアスペクトを定義しているため、呂の定義は従来のアスペクトの定義と同じ、戴の定義はアスペクチュアリティに傾いているように見える。しかし、中国語にはパーフェクトがあるかどうか、アスペクトに属するかどうかという問題についてあまり扱われていないため、中国語におけるパーフェクトの問題は未だ不明のままであると言える。中国語のパーフェクトについて本章の3.0節で詳しく論じたい。

一般言語学的な観点からの定義にしても、個々の言語からの定義にしても、基本的にアスペクトを内的な時間構造を表すものと規定していると言える。須田(2010)が述べた通り、「アスペクト的